

アウグスチヌス “De Baptismo, contra Donatistas” に表われた洗礼論上の諸問題について (5)

石橋 泰助

第八章 (第十)

『さて、異邦人コルネリウスの願いは聞き入れられなかったのでもなく、彼の施しは受け入れられなかったのでもない。むしろ天使さえ彼のもとにつかわされ、その天使を見るにふさわしい者とされたのであって、誰も来ないうちにその天使を通じてすべて必要なものをたしかに学ぶことができたのであった。しかし、〔彼が〕キリスト教的交流 (societas)²⁾と平和との絆によって教会に一体化されていないならば、祈りや施しにどのような善があったとしても彼には役に立つことができなかったので、彼はペトロのもとへ〔人を〕つかわすように命じられ、彼〔ペトロ〕を通じてキリストを学び、彼を通じて洗礼も受け、善業の類似だけによってつながっていたそのキリスト教的民に共同体の結合によっても結ばれているのである。²⁾ たしかに、持っていたものに散り高ぶって、まだ持っていない善をさげすむことは有害〔なことである〕。このように、自分を他の人々の交流から切離しながら、愛を破壊することによって一致の絆を断ち切っている人々も、もしその交流の中で受け入れたものを何ひとつとして行なわないならば、すべての事柄において切離されてしまうのである。それゆえ〔ドナートゥス派が〕自分たちの仲間にしようとした人が、もし教会へ来たいならば、〔その人は〕まだ受け入れなかったすべてのものを受け入れなければならない。しかしもし彼ら〔ドナートゥス派〕がかなり多くの〔私たちと〕同じことを行なっているならば、そ

の事柄においては自分を切離してはいないのであって、その点からは〔教会の〕組織の結合のうちにとどめられており、他の事柄においては切離されているのである。したがって、もし彼らがある人を自分たちの仲間にしようとするならば、彼らが〔教会から〕切離されていない点についてはその人も教会に結ばれるのである。それゆえ、もしその人が教会にやって来ることを望んだなら、その人は〔教会から〕引裂かれて誤っていたその点においてはいやされるのであり、健全で〔教会に〕結ばれていた点においては直されるのではなく承認されるのである。それは、私たちが健全なものを直そうと欲して、かえって傷つけてしまうことがないためである。それゆえ、彼らは授洗する人々を偶像崇拜や不信仰の傷からいやしはするが、分裂の傷によってもっとひどく打倒してしまうのである。すなわち、神の民の中の偶像崇拜者は剣が取除くが、³⁾ 分裂者は地の裂目が呑み込むからである。⁴⁾ それで使徒〔パウロ〕は「もし私が山を移すほどの完全な信仰を持っているとしても、愛を持っていないければ無価値である」⁵⁾ と云っているのである。』⁶⁾

アウグスチヌスは本節において、前節の主張内容を継続するのではなく、むしろ第一章第二節および第二章第三節ですでに論じられたテーマ、すなわち信仰における一致と分離の原則についての考え方を再び取上げ、これを新しい角度から分析して行くのである。本節は、1. 使徒行録に述べられた異邦人コルネリウスの例を上げ⁷⁾、2. この例を信仰における一致と分離の原則に適用してドナートゥス派の立場を解釈し、⁸⁾ 3. 分裂は偶像崇拜や不信仰よりももっと恐ろしい罰を招くことを聖書から例示する、⁹⁾ という三つの部分に分けられる。以下この区分にしたがって内容を検討して行くこととする。

1. アウグスチヌスは、使徒行録 10 に述べられた異邦人コルネリウスの回心のいきさつを取上げて要約し、そこから一つの原理を引出して提示

する。すなわち、人は祈りや施しなどの善徳によっても教会につながれるが、キリスト教的交流や平和などの共同体的絆によって完全に教会に一体化されるのであり、後者がなければ前者だけでは救いに役立つことはないのであって、後者は教会の役務者を中心とした交流とそれに参加するための洗礼とのうちに成立つということである。この考え方によれば、善徳による教会との結合は類似による結合であって、そのものとして救いを実現するものではなく、むしろ救いへの道に導く恵みを受けるにふさわしい者とみなされる根拠なのである。したがって、善徳による教会との結合は、それ自体が自己完結的なものではなく、あくまで交流と洗礼による教会との真の結合へと方向づけられたものであり、そのかぎりにおいて救済論上の価値を有するものとなるのである。アウグスチヌスは、こゝで教会との真の結合の主要素をキリスト教的共同体における相互の交流と和のうちに見ており、この結合にとって洗礼が不可欠であることを前提としながらも、洗礼の役割が何であるかについてはこゝでは何も触れていないのである。

2. アウグスチヌスは、コルネリウスの例に見られる上記の原理を信仰における一致と分離の原則に適用し、こうしてドナートゥス派の持っている立場とその状況が読者に一層よく分るように説明して行く。まず、彼は「持っているものに傲り高ぶって、持っていない善をさげすむことは有害」という道徳律を述べる。このテキストは前後の文章と必ずしも継続してはおらず、文脈上はこのテキストがなくてもアウグスチヌスの主張内容は変わらないし、むしろない方が文脈がはっきりするであろう。しかし、このテキストは、後で述べられるドナートゥス派の状況がいかに有害なものであるかを読者に印象づける修辭的効果を有していることを認めることができよう。

ドナートゥス派は、受洗以前のコルネリウスの場合と比較すると、はるかに大きな絆で教会と結ばれている。すなわち、彼らは善徳においてばか

りではなく、共通の信仰と洗礼においても教会と結ばれているのである。しかし、彼らは交流という絆を断ち切って愛を破壊しているという点においては、受洗以前のコルネリウスの状況により近いのであって、教会との真の結合を欠いているのである。アウグスチヌスは、たゞこのひとつのことを欠いているために他の一切を所有しながら、それらがすべて無益となることの悲劇性を強調することによって、ドナートゥス派で受洗する人々に対して、教会に復帰するときは何も失うことなく受け入れられるのであることを呼びかけて帰正を促すのである。アウグスチヌスがこゝでくり返し述べている「自らを教会から切離している点については教会から切離されているが、その他の点については教会に結ばれている」という原則は、ドナートゥス派自身だけではなく、ドナートゥス派で受洗する人々にも当てはまる原則であって、次節でさらに詳しく論述されて行く。

3. アウグスチヌスはすでに第四章第五節において、分裂の悪は背教の悪と同じレベルの兇悪性を有していることを述べている。¹⁰⁾しかし、こゝでは分裂が偶像崇拜よりもっと大きな悪であることを旧約聖書の記述を用いながら示している。すなわち、分裂は最も大切な愛の絆を破壊することによって、善徳による教会との結合も、洗礼による教会との結合も、すべて救いにとって役立たないものとしてしまうため、せめて善徳の絆によって結ばれていた人の改宗以前の状態よりもっと悪い状態に陥し入れてしまうがゆえに、不信仰よりもっと兇悪なのである。アウグスチヌスはこのことを、旧約聖書の二つの記述、すなわちモーセの不在中アーンを責めて金の子牛を作らせて拝んだ民が罰として剣で刺し殺されたという事件(出エジプト記 32)と、モーセとアーンの指導に反抗して民を煽動した者が割れた地面に呑み込まれ滅ぼされたという事件(民数記 16)とを比較して証明しようとしている。すなわち、偶像崇拜者が刺殺という人為的刑罰で滅ぼされたのに対し、分裂行動をした者が割れた地面に呑み込まれるという天罰で滅ぼされたのは、後者のほうがはるかに大きな神の怒りにふ

れたからであるとみなしているのである。背教者 (apostata) も偶像崇拜者 (idoloratra) も、神から最も遠い者とみなされていた当時において、ドナートゥス派をそれらよりも一層兇悪な者として示すことは、アウグスチヌスがドナートゥス派に対していかに激しい敵愾心を持っていたかを如実に示すものと解することができよう。彼は自らの主張の決定的な根拠として1コリント13のパウロの言葉を引用する。このテキストの引用はあとで更にくり返され、ドナートゥス派論駁の論拠として用いられて行くのである。

(第十一)

『もし、ある人が体のある致命的な部分に大きな傷を負って医者のもとへ連れて来られ、医者が「直さなければその〔傷の〕ために死にます」と云ったならば、彼を連れて来た人々が彼の健康な他の肢体を思いまた数えて、「この健康なすべての肢体が彼の生命にとって役に立たず、そのたったひとつの傷ついた肢体が死に至らせるのですか」と医者に答えて云うほど分別がなくなるとは私は思わない。たしかに、彼らはこうは云わず、むしろ〔彼が〕いやされるように〔医者に〕任せるであろう。いやすように任せたからと云って、彼は健全であるものまでもいやすようにと頼んでいるのではない。むしろそこから死が他の健全なところにまで迫ってきて、〔傷ついたところが〕いやされなければ〔死が全身に〕及ぶであろうそのひとつの箇所へ急に薬をつけるように〔と頼むのである〕。したがって、分裂の致命的な傷によって愛という健康が奪い取られた場合、これ〔愛という健康〕だけが奪い取られたために、それ〔健全な他の所〕全体も死に引込まれるのであるから、健全な信仰やあるいはおそらく健全な信仰の秘跡だけ〔を持っていること〕は人にとって何の役に立つであろうか。そういうことにならないように、彼ら〔ドナートゥス派〕が〔教会に〕やって来て和解という薬、すなわち平和の絆によっていやされるために、神の慈愛は、聖なる教会の一致を通して

〔働き〕やまないのである。それゆえ、彼らは何か健全なものを持っていると私たちが云うからと云って、自分たちが健全であるなどと思わないようにせよ。また反対に、私たちが〔彼らのうちに〕何か傷つけられているものを示すからと云って、健全なものがいやされるべきだと〔云われていると〕思わないようにせよ。つまり、彼らは秘跡の健全さにおいて私たちに反対していないので私たちのために居るのであるが、分裂の傷においてキリストと共に集めていないので¹¹⁾ 散らしているのである。¹²⁾ 彼らは所有しているものによって賞讃されることがないように。どうして彼らは健全なものだけ〔を見ること〕によって傲り高ぶった見方を引出すのか。彼らは自分の傷をも謙虚に眺めるようにし、有るものだけではなく、無いものをも見つめるようにするがよい。』¹³⁾

アウグスチヌスは本節で前節に述べられた論旨をさらに展開して行く。すなわちまず、1. 致命的な傷を負った人の治療という例を示し、¹⁴⁾ 2. この例をドナートゥス派に適用しながらその置かれている状況をより明確にして行くのである。¹⁵⁾ 以下この区分にしたがってテキストの内容を吟味して行く。

1. アウグスチヌスがこゝで示している例は、医学の進歩した現代においてもそのまま受入れることができるであろう。彼は自然生命における負傷を治療する場合に必要なことは、健全な部分ではなく負傷した部分の治療であって、また健全な部分が負傷した部分よりどれほど大きくても、その傷が致命的であればあるほど治療しなければ遂には健全な部分までも死に至らしめる、という誰にでも分る具体例を取上げるのである。この例によって彼が強調しているのは、致命傷はそれが他の健全な部分に較べてどれほど小さくても、治療しなければ全身を死に至らしめる、という点である。彼はこの点をドナートゥス派論駁のために援用するのである。

2. アウグスチヌスは自然生命における上記の関係を、致命傷と分裂、生命と愛をそれぞれ対比しながら信仰上の生命に適用する。すなわち、分派は異教や背教と異なって、大体において正しい信仰を有しており、そのかぎりにおいては健全な状態にあると考えられる。ここで、「健全な信仰や、あるいはおそらく健全な信仰の秘跡だけを有している人」という言い方がみられる。これは、ドナートゥス派を全体としてカトリックと同じ信仰を有しているとみなすか、あるいは信仰においてもほとんど離れてしまっており、せいぜい信仰の秘跡すなわち洗礼のみを共有しているにすぎないとみなすか、カトリック側にも見解の相違があることを暗示していると受け取ることができよう。アウグスチヌス自身の判断は示されていない。いずれにしろ、たとえ信仰において健全であるとしても、分裂という致命傷がいやされぬ限り、愛という生命は死に向っているのであり、信仰の健全さのみでは生命を回復することはできないのである。この致命傷をいやす唯一の薬は和解であって、もしドナートゥス派がカトリック教会と平和の絆によって結ばれるなら、彼らの有している健全な信仰がすべて救いに役立つものとなるのである。

アウグスチヌスは以上の見解を述べることによって、救いの根本的な構造を示しているのである。すなわち、キリストにおける救いの恵みは、信仰および信仰の秘跡である洗礼を不可欠の要素とはするけれども、信仰および洗礼のみによってもたらされるのではなく、信仰および洗礼によってキリストにおける愛の交流である教会に参与するからこそもたらされるのである。アウグスチヌスは他の諸書の中でもたびたびこのことを強調している。¹⁶⁾ それゆえ、アウグスチヌスの考えによれば、ドナートゥス派は分派行動によって根本的に教会における一致という愛の絆を傷つけ破壊しているために、他の一切の事柄において正しくてもキリスト御自身から切離されているのであり、救いの恵みを受けられない状態になっているのである。アウグスチヌスは救いの恵みに対する一致の愛の不可欠性を次節以降でさらに詳しく述べるのである。

彼は以上の立場に立って、ドナートゥス派の状況を描写するために前に引用した福音書の二箇所の合成句をこゝで再び取上げ、¹⁷⁾ ドナートゥス派の秘跡などを「私たちと共に居る」部分とし、分裂という傷を「キリストと共に集めない」部分とすることによって、一見矛盾しているこの合成引用句をわざわざ作成した真意を解き明かしているのである。

第九章（第十二）

『彼ら〔ドナートゥス派〕は、もし或るひとつのものが欠けたならばどれほど多くのものもどれほど大きなものも何の役にも立たないということを見るがよく、またそのひとつのものとは何であるかを考えるがよい。彼らはこの事について、私にではなく使徒に聞くがよい。彼〔パウロ〕は云う、「たとえ私が人間と天使たちの言葉で話しても、愛を持たないならば鳴っている銅鐘、響いているシンバルとなる。また、たとえ私が預言を有し、すべての秘義と知識を知り、たとえ山を移すほどの完全な信仰を持っていても、愛を持っていなければ無価値である」¹⁸⁾。したがって、たとえ彼らが聖なる秘義において天使の言葉を持っており、またカイファやサウロのようにときに預言するほどの預言〔能力〕を持っているとしても、彼らには何の役に立つであろうか。聖書は彼ら〔カイファとサウロ〕が罰を受けるべきものであったことを証言しているのである。たとえ、彼ら〔ドナートゥス派〕が秘跡を知っているだけでなく、魔術者シモンが有していたように有してさえいるとしても、——悪魔がキリストを告白したように（すなわち「われわれとあなたとに何の関係があるのか、神の子よ、われわれはあなたが誰であるかを知っているのだ」と述べたとき、彼ら〔悪魔〕は信じなかったのではない）、たとえ彼らが信仰を持っているとしても、——カトリックにおいてばかりでなく、さまざまな異端においても多くの人々が行なっているように、たとえ彼ら自身、自分たちの財産を貧しい人々に分配するとしても、¹⁹⁾ ——どこかで迫害が生じるとき、たとえ彼らが〔私たちと〕同じように

告白している信仰のゆえに、私たちと一諸に自分の体を焼かれるために渡すとしても、〔彼らには何の役に立つであろうか〕。けだし、彼らは愛のうちに互いに忍び合わず、平和の絆のうちに精神の一致を保とうと努めず、分離してこれらのことを行なっているのであるから、結局愛をもたないことによって、彼らには、何の役にも立たないこれらすべてのものをもってしても、彼らは永遠の救いに達することができないのである。』²⁰⁾

アウグスチヌスは本章で、一切の善行が救いにとって有益となるか無益となるかの決め手は愛にある、という前章のテーマをさらに追及し展開して行く。本章は内容的には一つであるが、便宜上つぎの三つの段落に分けて考察することとする。

1. 愛が救いにとって不可欠であり決定的であることの聖書的証言として1コリント13, 1-2を引用する。²¹⁾ 2. つぎに上記引用箇所述べられた個々の賜物や善行が愛なしには無益であることを、それぞれ聖書の具体例を上げながら証明する。²²⁾ 3. 以上からの結論として、ドナートゥス派の有している一切の善が、愛を破壊する分派行動によって、救いのために全く無益となってしまいことを主張する。²³⁾

1. アウグスチヌスはまず、ただひとつのものが欠けると他の一切のものを有していても救いのために何の役にも立たなくなる、そのたゞひとつのものとは何か、と問いかける。これに対する答はすでに前章における致命傷と健康の例にもとづくドナートゥス派批判の中に含まれているのであるが、アウグスチヌスはさらにこの一つの点に集中して論じるため、読者の注意をそこに惹きつけるのである。そして、その解答としてパウロの1コリント13, 1-2を引用する。こゝはパウロの愛の讃歌とも云うべき箇所で、愛の不可欠性や意味、絶対的優位性などが述べられている。アウグスチヌス自身、たびたび種々の作品の中で愛の本質や特性、および重要性な

どを独創的な言葉で述べているが、その論拠が聖書にあることは明らかである。こゝでパウロのこの箇所を引用したのは、もちろん使徒の権威に拠ることによって、自己の主張の正しさを証明するという意図が第一であったと考えられるが、同時に愛の絶対性についてこれ以上迫力のある完璧な表現は、アウグスチヌスの才能をもってしても不可能であった、ということにもよると考えられよう。いずれにしろ、この引用によって、先の問いかけに対する解答は愛である、ということが一点の疑いの余地もなしに示されているのである。

2. アウグスチヌスは、パウロが上記の引用箇所とそれに続くテキストの中で愛と対比しているいくつかの賜物や善行為をひとつひとつ取上げ、聖書の具体例に言及しながらこれをドナトゥス派に適用し、彼らがたとえこれらすべての賜物や善行為を有していたとしても、一致の愛を欠いているがゆえに、救いのために無益となってしまう、ということを論証して行く。

まず、「彼らが、たとえ聖なる秘義において天使たちの言葉を持っており」と述べるが、これに対応する聖書の具体例は示されていない。1コリントで用いられた「秘義 (*μυστήριον*)」²⁴⁾ は、「神の意図を内に秘めている事柄」あるいは「秘められた袖の意図」そのものを意味していると考えられる。²⁵⁾ アウグスチヌスは、1コリントの引用テキストでは *sacramenta* を用い、続く本文テキストでは *mysteria* を用いている。彼は通常、*sacramentum* と *mysterium* を明白に使い分けており、前者を「恩恵の可視的しるし」、後者を「信仰によってのみ知られる隠れた神的事柄」の意味で用いている。²⁶⁾ したがって、アウグスチヌスは彼の用いているラテン語訳聖書のテキストにおける *sacramenta* が、彼自身 *mysteria* で表現していることと同じ意味を有していることを正確に理解していた、と考えるべきであろう。このことは、本書とほぼ同時代に完成したヴルガタ訳ラテン語聖書においては、*μυστήριον* の訳語として *mysterium* と *sacra-*

mentum とが併用されていることを考えると、²⁷⁾ アウグスチヌスの上記の使い分けが秘跡概念の発展に大きく貢献し、秘跡についてより厳密な分析と考察を可能とした、ということをも認めることができよう。²⁸⁾ ともあれアウグスチヌスはここで、聖なる秘義において天使たちの言葉を有していたにもかかわらず、愛が欠けているために神の審きを受けた、という例を聖書の中に見出さなかったと思われ、たゞ単的に引用句をくり返しているのである。

つぎに、「カイファやサウロのようにときに預言するほどの預言〔能力〕を持っているとしても」と具体的な例を上げて述べている。ヨハネ11, 51・52には、大祭司カイファがイエス一人の死によって民全体が滅びないことをよしとしたことは、大祭司として預言したことである、と記述されており、また1サムエル10, 10には、サムエルから注油されたサウロが預言者の一団と共に預言の行為をした、ということが記されている。アウグスチヌスは、カイファがヨハネ福音書において預言を行なったと云われる行為をしながら救主キリストに対して敵対行動をとったこと、およびサウロが預言者と共に預言的行為をするほどの能力を有しながら、ダビデを王として立てようとする神の意志に反してダビデに敵対したこと、をともに救いのために「何の役にも立たなかった」とみなしているのである。むしろ彼は、カイファもサウロも神の意志への反抗のゆえに罰を受けるものとなったことを聖書が証明している、と主張するのである。

さらに、「魔術者シモンが〔秘跡を〕有していたように、〔ドナートゥス派も秘跡を〕有しているとしても」と述べている。これは使徒行録8, 13以下の、洗礼を受けた魔術者シモンが聖霊を授ける権威を金銭で買い受けようとしてペトロから激しく叱責されたエピソードを指している。この場合の「秘跡」は複数形 **sacramenta** が用いられているので、シモンが受けた洗礼だけではなく、買い受けようとした聖霊を授ける権威（叙階）をも含めていると考えるのが妥当であろうが、ドナートゥス派に対してはとくに洗礼の秘跡が強調されていることは明らかである。

また、「悪魔がキリストを告白したように」と述べている箇所は、マルコ 1, 23・24 に記された汚れた霊につかれた人の「ナザレのイエス、あなたはわたしに何の関係があるのか。……わたしはあなたが誰であることを知っている。神の聖なるかただ。」という叫びを指している。アウグスチヌス自身、こゝで汚れた霊につかれた人の言葉を引用している。彼はこのテキストによって、悪魔がイエスを神の子と信じた信仰を有していたものと解釈しているのである。

つづく「たとえ自分たちの財産を貧しい人々に分配するとしても、……たとえ信仰のゆえに自分の体を焼かれるために渡すとしても」という記述は、聖書の具体例ではなく現実に行なわれていること、および歴史的に実際に行なわれたことを具体例として示しているのであるが、用語そのものは 1 コリント 13, 3 からの引用である。

アウグスチヌスは、以上のように 1 コリント 13, 1-3 に述べられた特別な賜物と善行為が愛なしにはすべて無益となってしまう、ということ、聖書の具体例や教会における実践例を上げながら詳しく論証し、これらすべてのことがドナトゥス派に当てはまることを主張しているのである。実際に、ドナトゥス派は行為における聖性に自派の正当性の根拠を置いているのである。しかし、アウグスチヌスは、ドナトゥス派がどのような優れた賜物を有していたとしても、またどのように優れた信仰にもとづく聖なる行動をとったとしても、愛がなければ、彼らの救いには何の役にも立たないことを、この聖書の言葉によって立証しようとしたのである。アウグスチヌスは「愛」に議論の焦点を絞って、ドナトゥス派の批判を展開して行く。

3. アウグスチヌスは、たゞ一つの不可欠なものが愛にほかならないことを聖書にもとづいて十分に立証した上で、ドナトゥス派にはこの愛が欠けているがゆえに彼らの誇りとしている一切の優れた点が無益になってしまう、という点を衝いて行くのである。すなわち彼は、ドナトゥス派

が分派行動をとったことによって決定的に愛を破壊してしまっている、他の全てのことが救いにとって無益となっている、と主張する。ここでアウグスチヌスは愛を「一致を保つ愛」の意味でとらえている。しかし、1コリント13に述べられた愛はもっと広汎な意味で述べられていると考えられる。したがって、分派行動をとっているドナートゥス派がこの広汎な愛を全く有していない、と断ずるのは少々無理なのではないか、という印象を受ける。しかし、前節ですでに述べたように、アウグスチヌスは愛の本質をキリストとの一致とそれにもとづいた相互交流と結合のうちに見ているのであって、それは具体的には可視的なカトリック教会における一致と交流のうちにはしか有り得ない、という立場をとっているのである。この考え方は、アウグスチヌスの神学思想を理解するために極めて重要であり、また救いにおける秘跡の役割、とりわけ洗礼の秘跡の位置づけを理解する上でも重要であるので、以下彼のテキストにもとづいてその要点を概略考察しておきたいと思う。

アウグスチヌスは、ヨハネにもとづいて、まず「神は愛である」という前提に立っている。すなわち、「君が愛を見るなら、君は三位一体を見る」²⁹⁾のであり、神に向かって「おお、永遠の真理、真理なる愛、愛なる永遠よ」³⁰⁾と叫ぶのである。それゆえ、「あなたは私たちの心を愛の矢で貫かれた」³¹⁾のであり、「われわれは愛により、神と一致し、神に似た者になる」³²⁾のである。人が有しうる愛は神の固有の賜物であり、³³⁾それは聖霊によって人に注がれるのである。³⁴⁾したがって、愛にもとづいていない一切のものは、それがたとえ自然的には善であっても神とは関係のないものであり、救いにとって無益なのである。すなわち、「愛がなければ、所有している他のものはすべて人間にとって無である」³⁵⁾のであり、「愛のないところで〔救いに〕役立つものは何もない」³⁶⁾のである。さらに、神の恵みの基礎として求められる信仰や秘跡でさえも、愛がなければ全く空しいものになってしまうのである。「愛なくしても信仰は存在しうるであろうが、それは有益ではない」³⁷⁾し、「信仰は偉大であるが、もし愛を有していない

なら何も役立たない」³⁸⁾。さらに、「すべての秘跡を有していても悪人であることはできるが、愛を有していて悪人であることはできない」³⁹⁾。しかるに、神の愛は教会のうちに存し、人々は教会のうちにあってのみこの神の愛に参与することができるのである。⁴⁰⁾ それは、「キリストの体である教会は愛の絆によってその頭とつながっている」⁴¹⁾ からである。それゆえ教会における愛の一致のうちに留まらない人は、神の愛そのものからも離れてしまうのである。すなわち、「キリストの愛は教会の一致のうちにしか保たれることができない」⁴²⁾ のであり、「傲慢は不和を、愛は一致を生む」⁴³⁾ からである。一致は愛の源泉であると共に、その実りでもある。⁴⁴⁾ それゆえ、この一致を破壊する分派行動は、決定的に兄弟愛を傷つけ、神の愛を失わしめるのである。⁴⁵⁾

アウグスチヌスは以上の考え方にもとづいて、ドナートゥス派が分派行動をとっていることだけでも、すでに決定的に断罪され救いから切離されたものとなっている、と主張するのである。彼は本書中でたびたびこの主張をくり返しており、「愛は聖霊の最大の賜物であって、それなしには人間のうちにある他のどんな聖なるものも、救いのために役に立たないのである」⁴⁶⁾ し、また「カトリック教会の交わりから切離された人々は愛を有していない。教会の一致を愛さない人々は神の愛を有していない」⁴⁷⁾ と明白に述べて、ドナートゥス派の立場を完膚なきまでに論破しているのである。こうして、ドナートゥス派の有している洗礼の秘跡は「有効 (validus) であるが無益 (inutilis) である」というアウグスチヌスの主張の論拠がさらに明確になった、ということができよう。⁴⁸⁾ アウグスチヌスは分派行動そのものに攻撃の矛先を向けながらも、それで事足りりとはせず、さらにドナートゥス派の論理全般に対しても詳細な分析と論駁とを継続して行くのである。

注

- 1) *societas*. 「*socius* (仲間)」を語源とし、こゝでは「共通目的をもった仲間としての交わり」を意味しており、「交友」「親交」とも訳しうるが、多人数間の交わりの意味を強調して「交流」と訳出した。 Cf. O. L. D., p. 1715.
- 2) Cf. Act 10, 1-48.
- 3) Cf. Ex 32, 1-28.
- 4) Cf. Num 16, 1-33.
- 5) 1 Cor 13, 2. 本節の引用テキストは *habuero* と *habeam* の相違以外はヴルガタと一致している。
- 6) De Baptismo, contra Donatistas, lib. 1, cap. 8, n. 10 (AOO 9, 166).
- 7) はじめより, “.... bonorum operum similitudine iungebatur. (……共同体の結合によっても結ばれているのである。)” まで。
- 8) “.... ne cum sana curare volumus, potius vulneremus. (……かえって傷つけてしまうことがないためである。)” まで。
- 9) 以下終りまで。
- 10) 本論文 (3), 『南山神学』第 4 号 (1981年) 70頁および 77-78 頁参照。
- 11) CSEL のテキストは “*quidquid cum Christo non colligunt...* [キリストと共に集めない物は何でも ……]” となっているが, AOO テキストは, “*quia cum...*” と修正され, 前句の “*quia contra nos non sunt,...*” との並行性がはっきり出るので, これに従って訳出した。
- 12) Cf. Mc 9, 40; Mt 12, 30. テキストに関しては, 本論文 (4) 『南山神学』第 6 号 (1983年), 51頁以下を参照。
- 13) De Baptismo, contra Donatistas, lib. 1, cap. 8, n. 11 (AOO 9, 166s).
- 14) はじめより, “.... et nisi sanetur adveniet. (……急いで薬をつけるように [と頼むのである。])” まで。
- 15) 以下終りまで。
- 16) この点については次章で考察する。
- 17) 第七章 (第九)。本論文 (4) 上記 52 頁以下, および 56 頁以下参照。
- 18) 1 Cor 13, 1-2. この引用はヴルガタ訳とほぼ一致している。たゞ *μυστήρια* (諸秘義) はヴルガタでは *mysteria* が用いられているが, アウグスチヌスの引用テキストでは *sacramenta* が用いられている。
- 19) AOO のテキストによれば, こゝで前の文章が終り, 以下終りまでが一つの文章になっているが, CSEL のテキストは本訳文のように区切られている。文脈からみても, また邦訳する場合も, 後者の方がより適切と考えられるのでこれに従った。

- 20) De Baptismo, contra Donatistas, lib. 1, cap. 9, n. 12 (AOO 9, 167s).
- 21) 始めより, “. . . . caritatem autem non habeam, nihil sum. (……愛を持っていなければ無価値である。)” まで。
- 22) “. . . . pro fide pariter confitentur. (…… 彼らには何の役に立つであろうか。)” まで。
- 23) 以下終りまで。
- 24) 1 Cor 13, 2 では τὰ μυστήρια と複数形になっている。
- 25) Cf. G. Bornkamm, “μυστήριον” ThDNT 4, 822
- 26) sacramentum については, cf. De baptismo, contra Donatistas, lib. 1, cap. 1, n. 2; ibid., lib. 3, cap. 10; De vera religione, cap. 17; De catechizandis rudibus, cap. 26; Contra litteram Petilian, lib. 2, cap. 104; Enarratio in Psalm. 40; De civitate Dei, lib. 15, cap. 26, etc. mysterium については, cf. De vera religione, cap. 17; Enarratio in Psalm. 140; Tractatus in Ev. Ioann. 117; Epist. 119, cap. 6; Sermo 41, etc. なお sacramentum と mysterium とが同じ意味で使用されている可能性についてはさらに詳しい研究が必要であるが, ここでは省略する。
- 27) Cf. Bornkamm, loc. cit., p. 827.
- 28) 筆者の論文「秘跡概念の発展についての一考察」『アカデミア』人文自然35号, 南山大学, 1982年, 26頁以下参照。
- 29) “Imo vero vides Trinitatem, si charitatem vides.” De Trinitate, lib. 8, cap. 8, n. 12 (AOO 8, 1334). 訳文は中沢宣夫訳「三位一体論」東京大学出版会, 1975年, 245頁より引用した。
- 30) “O aeterna veritas, et vera charitas, et chara aeternitas!” Confessiones, lib. 7, cap. 10, n. 16 (AOO 1, 241). 訳文は山田晶訳「告白」中央公論社, 1968年, 238頁より引用した。
- 31) “Sagittaveras tu cor nostrum charitate tua,” Ibid., lib. 9, cap. 2, n. 3 (AOO 1, 270). 訳文は山田訳同上書 290 頁より引用した。
- 32) “Fit ergo per charitatem ut conformemur Deo, et ex eo conformati atque configurati,” De moribus eccles., cap. 13, n. 23 (AOO 1, 1127). 訳文は熊谷賢二訳「カトリック教会の道徳」創文社, 1963年, 50頁より引用した。
- 33) Cf. De Trinitate, lib. 15, cap. 18.
- 34) Cf. De spiritu et littera, cap. 21, n. 36; cap. 33, n. 59.
- 35) “. . . . charitas, sine qua nihil est homo, quidquid aliud habuerit.” Tractatus 7 in Ev. Ioan., cap. 3 (AOO 3, 1755).

- 36) “Ubi autem [charitas] non est, quid est quod possit prodesse?”
Tract. 83 in Ev. Ioan., cap. 3 (AOO 3,2297).
- 37) “Sine charitate quippe fides potest quidem esse, sed non et prodesse.” De Trinitate, lib. 15, cap. 18, n. 32 (AOO 8,1497). 訳文は上記中沢訳 467 頁より引用した。
- 38) “Magna est fides, sed nihil prodest si non habeat charitatem.”
Tract. 6 in Ev. Ioan., cap. 21 (AOO 3,1750).
- 39) “Ergo habere sacramenta ista omnia et malus potest; habere autem charitatem, et malus esse, non potest.” Tract. 7 in epist. Ioan., cap. 6 (AOO 3,2552).
- 40) Cf. Enarrat. in Psalmum 131.
- 41) “Hoc autem corpus nisi connexione charitatis adhaereret capiti suo, ut unus fieret ex capite et corpore,” Enarratio in Psalmum 30, sermo 1, n. 3 (AOO 4,210).
- 42) “Charitas enim christiana nisi in unitate Ecclesiae non potest custodiri.” Contra litteras Petilianiani, lib. 2, cap. 77, n. 172 (AOO 9,426); cf. Sermo 6, cap. 9.
- 43) “. . . . superbia parit discissionem, charitas unitatem.” Sermo 46 (de pastoribus) cap. 8, n. 18 (AOO 5,337).
- 44) Cf. Sermo 6, cap. 9; Tract. 6 in Ev. Ioan.; De moribus Ecclesiae catholicae, cap. 33, n. 73; De doctrina christiana, prolog.; etc.
- 45) Cf. De fide et symbolo, cap. 10, n. 21.
- 46) “[charitas] est maximum donum Spiritus sancti, sine quo non valent ad salutem quaecumque alia sancta in homine fuerint,” De baptismo, contra Donat., lib. 5, cap. 23, n. 33 (AOO 9,268).
- 47) “Ipsa est enim charitas, quam non habent qui ab Ecclesiae catholicae communionem praecisi sunt: Non autem habent Dei charitatem, qui Ecclesiae non diligunt unitatem.” Ibid., lib. 3, cap. 16, n. 21 (AOO 9,209).
- 48) 本書第一章第二節。本論文 (1)『南山神学』第 2 号, 1979 年, 10 頁以下参照。

*Concerning Problems of the Theology of Baptism
Found in St. Augustine's "De Baptismo, contra
Donatistas" (5)*

Taisuke ISHIBASHI

In this treatise, three sections of St. Augustine's "De Baptismo, contra Donatistas," that is, Number 10 and 11 (Chapter 8) and Number 12 (Chapter 9), are treated.

We may divide Section 10 (Chapter 8) into three parts. In the first part, Augustine takes up an episode of Cornelius from Acts 10. In the second part, he applies this case to the principle of "union and separation on faith," and interprets the opinion of the Donatists by using this principle. In the third part, he quotes the Old Testament and shows that schism causes a more fatal punishment of God than idololatriy.

Section 11 (Chapter 8) may be divided into two parts. In the first part, Augustine gives an instance of seriously wounded person, and explains that urgent medical treatment of his wounded part is required, even though other parts of body may be healthy. In the second part, by using this instance he makes the situation of the Donatists more clear.

We may treat Section 12 (Chapter 9) under three parts. In the first part, Augustine cites 1 Cor 13, 1-2 for a biblical witness which teaches that charity is indispensable for salvation. In the second part, he proves that each spiritual gift and good practice, which is described in that Pauline text, is useless without charity. In the last part, he asserts that all the spiritual gifts and good practices of the Donatists are in vain because of their schismatic situation.